

「そしある」さん 第 1号

2025年11月発行 編集担当：樋口

●名刺の働きアレコレ～地域の保健・医療・介護・福祉関係機関等との連携・協働～

名刺を整理してみた。

MSWは、病院の専門職の中でも、院内外が多職種と協働することが多い。地域医療連携が叫ばれるようになり、日頃から地域の医療機関や介護施設との情報共有が必須になり、定期的な訪問も欠かせない。顔の見える連携といわれる所以である。

また、MSWの研修はグループワークも多く、私は先ず始めに名刺交換をするタイミングを計る。だいたい私が一番年上のことが多いが、サッサと自分から挨拶した方が、気持ちが落ち着くものだ。私は忘れっぽいので、名刺交換をしたら、会った日付けや短いメモを書いておく。

そして名刺を一度に沢山使うのは、全国規模の研修会等に参加した時だ。日本MSW協会の全国大会や九州MSW大会には、殆ど欠かさず参加してきた。懇親会では各県の役員が初任者を連れて挨拶回りをしたりするので、何枚も名刺が集まる。全国大会は自らの研修の機会だが、県協会の研修企画をする立場の時は、講師候補者を探す場にもなった。研修講師には、内容は元より、話しが分かり易いことが求められる。実際に聞いてみて、この方かと思ったら、講演が終わるとすぐに講師に駆け寄り、名刺をお渡ししてご挨拶し、講演内容の感想を述べ、「是非沖縄に来て頂きたい、ご連絡して宜しいですか?」とお願いする。初対面で失礼ですが、名刺に「沖縄でご講演をお願い致します」とメモしてお渡しするのだ。これまで断られたことは一度もない。

何冊にもなった名刺ファイルは、県内の医療機関・介護施設・各県別の医療機関・患者会などの支援団体別になっている。日常の相談・支援業務では、情報収集や何か教えて頂きたい時、困って相談したい時に役立った。県外に退院されるクライアントの場合も、名刺を頼りに問い合わせ、橋渡しをして頂いたり心強い。

さて、名刺を整理するにあたって、処分する目安を「顔を思い出せる人」にした。昨今は名刺もデータ管理出来るようだが、一枚一枚眺めてみた。終わってみると、殆どが顔を思い出せず処分することに。私の認知症状が始まって忘れてるにしても、残った物は思ったより少ない。顔を思い出せる人は、クライアントと一緒に支援した方や、研修等を企画・運営したメンバー、様々な地域活動に取り組んだ仲間だ。やはり、何らかの人としての交流があった人は、その場面が思い出される。もうMSWはしていないのだから、名刺は要らない筈だが、MSW志望学生から病院見学の仲介等を依頼されるので、あと少しの間は残しておこうと思っている。

最後に、整理していて気づいたことがある。それは名刺に書かれた肩書きだ。古い名刺には、ケースワーカー・相談員とだけの物もある。退職時の名刺には、MSWと並んで国家資格や認定資格、職位等が幾つも書いてある。患者さんやご家族に渡すカードは手作りし、見やすく分かりやすい大きな字で、職種と名前・病院名・電話番号のみにし、裏には主な相談内容等が書いてある。

初めて名刺を作る時は、何と自分を称するか悩んだものだ。私の職種・専門性・業務内容を示すものだから。医療ソーシャルワーカーと社会福祉士の順序をどうするか?に拘ってもいた。そして、相手に渡す時、『医療ソーシャルワーカーの〇〇です。』と称することで、曖昧な仕事に自信がない自分を律していたように思う。さて、職業を全て終え、名刺を持たなくなったら、私は自分を何と称するのだろう。

●MSWのつぶやき（編集後記）：

「そしある」は、MSW業務を振り返って考えたことなどを書いていきます。時々、私事が含まれたり、テーマがあちこちに飛んで、系統だっていないこともあると思いますが、なるべく「MSW業務指針」や「ソーシャルワークのグローバル定義」等に引き寄せられたらと思っています。

ちょうど今、業務指針の改定作業が行われていますので、新旧のガイドラインの違いも意識したいです。創刊0号では、MSWという職種のポジショニング～「組織上の位置づけ」「医療ソーシャルワーク部門の体制整備」～に関連しています。表現や認識に間違いや、お気づきの点がありましたら、ご指摘ください。内容へのご意見・ご感想もお寄せ下さい。●連絡先：m.higuchi@oku.ac.jp